

「卑弥呼の鏡」の焦り

新井宏

私にとつてロマンを想わせる言葉。それはアングルシ
ア、まほろば、そして邪馬台国……。邪馬台国の卑弥
呼をヒロインにした横光利一の小説『日輪』は、光ある
感覚的な表現と英語直訳調の会話文が妖しく躍り、青春
の私を古代にいざなつた。

邪馬台国はどこにあつたのだろうか。謎はロマンを深
め、論争は熱狂的なファンを生む。いまや邪馬台国と題
する書物が月二冊のペースで出版され、既に四百冊に達
する勢いである。邪馬台国と名付けさえすれば五千冊は
売れると云うのが出版界の常識らしい。

だから新聞も邪馬台国の記事を大きく扱う。昨年五月
の泉屋博古館の発表の場合もそうであつた。多くの新聞
が一面で「卑弥呼の鏡、中国鏡と成分一致」と大々的に
報じたのである。それは「三角縁神獸鏡が卑弥呼への下
賜鏡であつた」ということを意味し、もし事実ならば邪

馬台国は大和説に決まる。

私はこのニュースを韓国にいて知らなかつた。たまた
ま年末に帰国して、三角縁神獸鏡に関係する私の新発見
を論文にしようとしてやつと気が付いた。

もしそうなら私の論旨と大きく食い違ふ。そして急い
で泉屋博古館の論文「スプリング8」を利用した古代青銅
鏡の放射光蛍光分析」を入手し一読して驚いた。すくな
くとも、金属考古学を多少でも知る者にとつては、とて
も容認しがたい議論がそこには展開されているではない
か。結論から言えば、微量成分のアンチモンが錫原料か
らもたらされたと言う前提条件そのものが完全に間違つ
ている。だから当然ながら結論も間違っている。

泉屋博古館の報告は、直径四百六十メートルもある巨
大放射光施設「スプリング8」を利用して、館所蔵の青

銅鏡八十八枚について蛍光X線分析したもので、その結果をアンチモンと錫の比率で整理すると、三角縁神獸鏡は中国の魏鏡に一致し、日本で作られた倭鏡には一致しないという内容であった。いわば三角縁神獸鏡は魏鏡であり、卑弥呼のもらった鏡に違いないというのである。

周知のように三角縁神獸鏡については、いま魏鏡説と国産説が激しく対立している。

魏鏡説は、大正九年に富岡謙蔵が三角縁神獸鏡の銘文「銅出徐州師出洛陽」について、徐州、洛陽、師の文字の組合せは魏代にだけ限られると考証したことに始まる。

その当時、銘文を持つ三角縁神獸鏡は無条件に中国鏡であり、問題は卑弥呼の鏡であるか否かだけにあった。しかも後のことにはなるが、卑弥呼が遣使した年（景初三年）の銘を持つ三角縁神獸鏡さえ発見され、魏鏡説は揺るがぬかに見えた。だからそれをベースに、昭和三十六年には京都大学の小林行雄が三角縁神獸鏡の同范鏡分有関係から、日本の古代国家の支配構造について壮大な構想を纏め上げ、日本の古代国家像を確立したのである。

しかし三角縁神獸鏡を魏鏡とするには不可解なことがいくつもあった。例えば中国鏡に較べると異常に大形化していて鏡面が凸型となり実用の鏡としての意味をなさないこと、鈕孔に中子砂が詰まったままのものやバリの手直しのないものがあること、それから中国鏡にはほと

んど見られない同型鏡が極めて多いこと、等々であるが、何といってもその最大のものは、日本での出土が五百面にも達しているのに、中国では未だ一面も見つかっていないことであった。

森浩一が中国に一面も出土していないことを根拠に初めて国産説を示唆したのは、もう四十年も前のことである。その後、網干善教が「踏み返し鏡」の存在を裏証し、小林説に再考をせまっても、あるいはアマチュア考古学者の奥野正男が三角縁神獸鏡に非中国的な傘松形文様が見られることを指摘し、本格的な国産説を唱えても、学界は無視し続けていた。

そこに登場したのが、昭和五十七年の中国考古学界の重鎮・王仲殊による渡来呉人日本産説である。中国鏡の研究を踏まえた王仲殊の考証、すなわち三角縁神獸鏡は呉鏡の系統を引くものであって、魏鏡の系統を継ぐ要素がほとんど見られないという指摘はさすがに日本の学界も無視できなかつた。魏鏡説への疑問が一気に高まり、今度は魏鏡説側が必死になって防衛する側に回った。その結果、京都大学系の若手考古学者、岡村秀典や福永伸哉らが様式論を再編し、三角縁神獸鏡にも魏鏡の要素が見られると反撃に出て、一定の成果を挙げたが、状況は不利であった。

そこに今度の泉屋博古館の発表である。福永伸哉などは「論争のボールはふたたび三角縁神獸鏡国産説の側に

投げかけられたといつてよからう」と喜びを隠さない。

泉屋博古館の発表は、アンチモンは性質の良く似た錫の原料に含まれており、その比率は錫の産地によって異なるとの認識に基づいている。だからアンチモンと錫の比率が異なれば、鏡の製作地も異なり、その結果として三角縁神獣鏡は魏鏡だと云うのである。

ところが、青銅鏡に含まれるアンチモンが錫原料から来るといふ認識自体が、完全な間違いであった。こんなことは青銅器の考古学を知る者にとっては初歩的な知識である。アンチモンは錫にも含まれるが、それ以上に古代の銅原料にはアンチモンが多量に含まれているのである。それは中国、日本に限らず、ヨーロッパにおいても一般的なことであった。

泉屋博古館は、中国における古代純銅の一分析例を挙げ、アンチモンが含まれていないことの論拠にしているが、反例なら有り余るほどある。第一、錫をほとんど含まぬ漢代の銅銭にもアンチモンが多量に含まれているのではないか。むしろアンチモンを含まぬ銅の方が例外なのである。それは古代銅の原料採取と精錬方法に関係することであり、技術的にも当然のことであるが、わずらわしいので先を急ぎたい。

それでもなお、錫とアンチモンの関係に固執する向きもある。それに対する反論としては出雲の荒神谷遺跡

から出土した銅剣の分析結果を挙げることができる。そこには錫の多い銅剣ほどアンチモンがえって少ないと云う逆の傾向さえ認められるのである。アンチモンは錫原料から来るものではなかった！。

したがって原料中のアンチモンを論ずるには、錫との比ではなく銅との比を使用しなければならぬ。そして泉屋博古館の分析結果を銅との関係で再整理して見て納得する。魏鏡も舶載三角縁神獣鏡も仿製三角縁神獣鏡も日本製の倭鏡も、全てアンチモンと銅の比率が同一値を示しているではないか。何のことはない。泉屋博古館の発表はまったく誤解に基づいたものであった。

ただしアンチモンと錫の比に差があるのは事実であり、それをどう解釈するのかとの反論もあるかも知れない。それは錫の組成に差があることを示しているからである。

しかし錫はアンチモンとは異なり、どんな種類の青銅器を作るかによって意識的に組成を変える成分である。鏡として、ステンレスのような白色の輝きを求める場合には錫を多くし、黄金色に輝く鏡を求める場合は錫を少なくするのである。三角縁神獣鏡にも錫の多いものと少ないものがあることなどは従来から良く知られていたこと、いまさら新しく解ったことではない。

それにしても泉屋博古館の発表はレベルが低すぎる。

それは金属に不案内だというだけではなく、青銅鏡に関する従来の研究をまったく参照していないのである。

例えば泉屋博古館の論文には「これまで、鏡にかぎらず古代青銅器について、主要成分以外の不純物として存在している微量成分に着目した研究はほとんどなされておらず……」とある。これなどは六十年以上も前の昭和十二年に、京都大学の梅原末治が小松茂、山内淑人に依頼して行った五十五件にもおよぶ古鏡の分析事例について「まったく知らなかった」ことを示している。そこには錫、鉛などの他に、アンチモンをはじめとして、砒素、鉄、ニッケル、亜鉛などの微量成分の分析が明示されているのではないか。

そればかりではない。泉屋博古館の発表は平成十年に山崎一雄が行った樺井大塚山古墳出土の三角縁神獸鏡の分析結果についてさえまったく参照していない。それは二十二面にもおよぶ舶載三角縁神獸鏡について、錫、鉛、鉄、ニッケル、砒素、ビスマス、コバルトのほかに、銀やアンチモンについても定量分析を実施したものである。おそらく原理的には蛍光X線分析よりもよほど正確なものである。

しかもこの分析結果を今度の泉屋博古館の結果と比較して見ると、まったく正反対の結論がもたらされる。アンチモンと錫の比で見ると、樺井大塚山の三角縁神獸鏡は、定説に反してほとんど全て泉屋博古館の言う仿製鏡

の範疇に入ってしまうのである。

もちろん私は山崎一雄の分析値によって、樺井大塚山の三角縁神獸鏡が国産鏡だと主張しているわけではない。もともと間違った前提条件から出発したのだから、発表者が意図したことと全く逆の結論が出ることもあると云っているだけなのである。

それにしても今回の発表はひど過ぎる。発表者が三角縁神獸鏡についてよほど無知だったのであるうか。いやいやそんなことは決してない。泉屋博古館の館長は、銅鏡研究の第一人者・樋口隆康だからであり、泉屋博古館の論文の共著者にもその名が載っているし、マスメディアへのスポークスマンをつとめたのも樋口隆康である。

樋口隆康は京都大学の考古学研究室で梅原末治のもとで講師をしていたことがある。いわば梅原末治の愛弟子である。その樋口が梅原末治の行なった銅鏡の化学分析結果を知らないとはどういうことなのか。そんなことはあり得ないだろう。忘れていたにしてはひどすぎる。

その上、樺井大塚山の三角縁神獸鏡の分析を行った山崎一雄の資料は、何と樋口隆康が監修した『樺井大塚山古墳発掘調査報告・京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第二〇集』に掲載されているのである。樺井大塚山古墳は若き樋口隆康が調査主任として、大量の三角縁神獸鏡を取り上げた記念すべき場所だから当然であろう。だか

ら樋口が山崎の分析資料を知らなかったとはとても云えないのである。いずれにせよ、京都大学派・魏鏡説の総帥として焦りもあつたのではなからうか。

そう云えば樋口隆康は、平成十四年にも問題を起したことがある。彼がイランを訪問した際に、同国南部のフールス地方で仏像を発見したという大ニュースである。仏像の出土地としては最西端になる発見であり、仏教は東伝のみならず、西伝もしていたことを裏付ける貴重な発見だというのである。これにいくつかの大新聞が乗せられ大きく報道した。しかしその仏像はどこで出土したのかさえ確認されていないガンダーラ仏のひとつに過ぎなかった。いわば樋口隆康には前科があつた。新聞社は用心してかからなければならなかつたのである。

それに、正規の学会誌でもない『泉屋博古館紀要』に論文を載せ、日本文化財科学会で口頭発表を行っただけで、マスメディアを呼び集め、大々的に宣伝する行為がなぜ許されたのか。自然科学分野であれば、どんな大先生でも厳しい査読を経た研究業績しかマスメディアにリリースすることはない。

しかし樋口隆康といえは、京都大学を代表する三角縁神獣鏡の権威である。しかも調査責任者として椿井大塚山古墳で大量の三角縁神獣鏡を取り上げたばかりでなく、黒塚古墳からも大量の三角縁神獣鏡を出土させ、考古学者冥利に尽きる人物である。マスメディアもまさか

と思つたに違いない。権威にはすぐに迎合するくせに、貴重な批判やアマチュアの新提案はさけて通る新聞の通例をそこに見る。

今、日本の考古学界の現状について、奥野正男が『汚れた神々の手』で、旧石器遺跡の捏造事件は藤村新一の単独犯行ではなく、文化庁の役人・岡村道雄たちが関与した組織的、共同体的な犯罪行為であつたと告発している。公表された事実関係からだけで、その核心にせまつた奥野正男は、そのことにより毎日出版文化賞を受賞した。そのことが明日の考古学界の改革に大きく役立つてあろうが、多くの考古学者はこれを無視している。

予算や人事権をにぎる行政学者や国立大の教授たちが、権威の衣のもとで自己に都合な事実を宣伝し、批判的な考証を黙殺する風潮を、私なりに苦々しく思つていた。いや憤つていたこともある。しかし、今は行政主導の発掘や、開発行為にともなう発掘が終焉に向かつている。もう豊富な予算など望めない。今後は、考古学にロマンを求める人達が考古学を支えて行かねばなるまい。

私は思う。研究はロマンに満ちた高尚な遊びだと。人類の長い歴史で、研究というノーブルな行為が職業化したのは、つい最近のことに過ぎない。研究するというこ

とは、小説家や画家、作曲家が売れない作品を書き続けるのに似て、最初から報酬を約束された世界ではない。だから職業的な研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に遅れをとったりアマチュアから痛烈に批判されるとは何事か。

また悲憤慷慨に陥ってしまったようだ。

ここは同人誌上。思い切って簡略化してのべたが、泉屋博物館の発表の問題点については、学会誌に発表するつもりで、詳細にまとめてある。しかし泉屋博物館の発表があまりにも非論理的なので、勢い敵しくならざるを得なかった。しかもマスメディアを通して発表された内容に対して、正式な学会誌で反論するのも、大人気ないと思ひ、結局は季刊誌『邪馬台国』に載せることにした。ちようど今、書店に出回ったところである。

そしてそのことが読売の記者の知るところとなり、三月二十五日の夕刊に紹介された。それは魏鏡説に大きな打撃を与えることになるだろう。内容的には、単に泉屋博物館の発表は何の意味も持たなかったというだけのことであるが、人びとはそうは受け取らない。そこに魏鏡説側の焦りを見るに違いない。

(追記) 筆者は四十数年前、日本金属工業というステ

ンレス鋼專業メーカーで新入社員として勤務していた。その時に出会ったのが、先輩で生涯の友となった杉本正勝博士である。その頃、杉本博士は日本で初めて蛍光X線分析を工業用として使うために悪戦苦闘しておられた。たまたま私は物理屋であり、業務とは無関係ながら、勝手に研究の手伝いをして、蛍光X線分析について多くのことを学んだ。その時に思ったことは、蛍光X線分析を金属遺物や文化財に適用したならば多大な成果を挙げることができようという確信であった。できるならば、文化財保護委員会にでも転職して、片っ端から遺物の分析をして見たい。そのような願望は結局実現できなかったが、今では考古学の分野で第二の人生を謳歌している。これも杉本正勝博士のお陰であると日ごろ感謝しているが、残念なことに杉本博士は十年ほど前にお亡くなりになった。ところで、この度のスプリング8を利用した分析も、本質的には蛍光X線分析の一種である。したがって、蛍光X線の利点とか欠点について良く知っている必要がある。その点から見ると、泉屋博の発表は記載が不十分で、なかなか踏み込んだ議論ができない状態にある。巨額な費用を使った研究であるだけに、研究内容のレベルを高める共に、もっとデータの公開にも意を用いてもらいたいと願っている。